

ストリートダンス避難訓練の開発

徳島大学環境防災研究センター

正会員○黒崎ひろみ

1. 研究の背景および目的

大規模な地震・津波災害から命を守るには、住民ひとりひとりの防災対策が問われる。すなわち住民の防災意識を向上させ防災対策を進めることこそが、地域防災力向上の最重要課題である。

徳島大学環境防災研究センターは、地域防災および環境を活動目的の大きな軸としている。演者は徳島県内の地域防災啓発を中心に活動しており、県内の各地域で学校防災教育および自主防災活動支援を行っている。学校防災教育の現場では、特に中学生への防災教育¹⁾に困難を感じ、彼らが能動的に取り組めるような防災活動を模索していた(写真-1)。そこで演者は、特に10歳代~20歳代に人気が高い「ストリートダンス」を用いて避難訓練を行う、「ストリートダンス避難訓練」を開発した。ストリートダンス避難訓練は、災害発生時の避難の方法と手順をダンスの振り付けにアレンジしたものである。本稿では、開発の経緯と実際の動きを解説するとともに、避難訓練の重要性を示す。

2. ストリートダンス避難訓練開発の経緯

1983年に映画「フラッシュダンス」が話題となり、日本にストリートダンスというカルチャーが輸入された。「ダンス」は日本の中で、広く話題にのぼるようになり、夜の駅前・学校などではダンスをする若者の姿も当たり前に見られるようになった。もはや一過性の流行ではなく、音楽・ファッション・ライフスタイルといった全ての要素が融合する、「ストリートカルチャー」として定着している。さらに、海外の大会でも、多くの日本人ダンサーが優秀な成績を収める他、高校生の間でもストリートダンス部が軽音部を抜いてその数を増やす等、まさに今、日本におけるダンスシーンは「ストリートカルチ

ャー」から一般カルチャーへと昇華する寸前の「旬」のカルチャーのひとつだといえるだろう。現在では学生シーン(クラブ・サークル活動)をボリュームゾーンとし、社会人団体、ダンススタジオ、専門学校、フィットネスクラブ等々、子供から大人までが楽しめる趣味にまでその裾野を広げている。学校防災教育の現場でも、ストリートダンスをやってみたい、あるいは見てみたいという意見が多い。一方演者は、15年以上のストリートダンス経験があり、徳島大学在学中にはchoreographerとして活躍していた。そこで、ストリートダンスの振り付けを避難訓練の方法と手順にアレンジした、ストリートダンス避難訓練を開発した(写真-2)。なお、一般的にストリートダンスとは「BREAKING」「HOUSE」「HIP HOP」「LOCKING」などが挙げられ、自由な表現が許されている唯一のダンスである。ストリートダンス避難訓練には上記4つのダンスに加え、「Moon Walk : (正式) Back Slide」に代表される「POPING」を用いる。なお、対象とする災害は「地震」「津波」「台風」「竜巻」「落雷」である。それぞれの災害に必要な避難の方法を、体験談を中心として作成している。音楽は、人気テレビ番組やアニメの主題歌を年齢に合わせて使い分ける。また、高校生、大学生にはDance Beatsを組み合わせた音楽を用いる。さて、同じ災害でも状況が違えば避難方法も変わる。たとえば、地震が発生したとき同じ学校内でも教室と理科室では子ども達のすべきことは異なる。教室ではその場にしゃがんで頭を守り、次に机の下に入って揺れが収まるのを待ち外へ避難するが、理科室でアルコールランプを使用している場合は、子ども達自

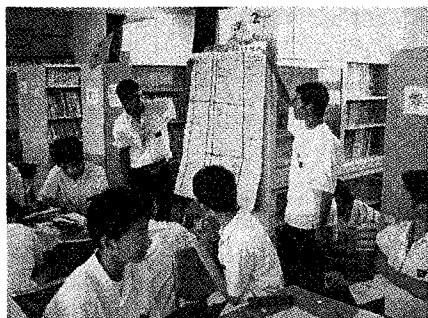


写真-1 中学生への防災教育



写真-2 2007年1月25日朝日新聞

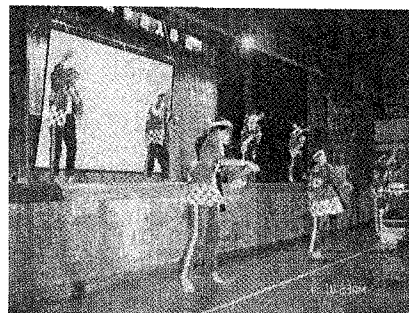


写真-3 学習発表会

らが外へ避難する前にその火を消さなければならない。ストリートダンス避難訓練は、年齢・能力・災害・状況に応じて40種類程度作成した。この避難訓練は、徳島県内の2高等学校、2中学校、3小学校、および徳島大学で実施した。徳島県西部の小学校では、年1回町内で開かれる学習発表会で、子ども達の希望からストリートダンス避難訓練が発表題材となった(写真-3)。また徳島大学では、ストリートダンス避難訓練に参加する学生らがDance Crewを結成し、各メディアへの出演とともに自主防災活動講習会などで同訓練の指導を行っている(写真-4)。

3. 振り付けの内容

ここでは、地震・津波に対する避難訓練の内、学校等で最もよく実施されている避難訓練を例とする。地震発生時の避難手順を示す；①しゃがんで頭を守る、②机の下に避難して脚の対角を握る(写真-5)、③屋外へ避難(写真-6)するときには「おさない、はしらない、しゃべらない」、④外へ出るときは靴を履く(写真-7)、⑤避難場所ではリーダーの話を聞く。

さて、上記をいくつか説明する。②：揺れている間は机も動くため、脚の対角を握らなければ机が移動し頭を守れなくなる。すなわち、机の下に入ったときは、脚の対角を握り頭が机から出ないようにする必要がある。③：「おさない、はしらない、しゃべらない」は避難時の定説であるが、これにまつわる実例がある。1995年の阪神・淡路大震災では、倒壊した家屋から脱出し火災の中逃げた人の「誰も奇声を発さなかった。誰かがパニックになれば皆パニックになっただろう」という体験談が残っている。また自然災害ではないものの、2002年の米同時多発テロにより倒壊の危機にさらされたWorld Trade Centerから逃げる人々が、「混乱を避けるため、ある意味本能的に押し黙ったまま階段を降りた」との談話もある。災害時は情報が限られ不安が募り、ひとたびパニックが起これば甚大な二次災害に繋がる。すなわち、沈黙を守り避難することは命

を守るために最も重要である。

④：靴を履く理由は、避難する時に足を怪我しないためである。1946年に発生した昭和南海地震では、はだしで避難しようとして足に木片の棘が刺さり、結局別の人に背負われて助かった人の実話がある。このような類例は過去の記録が残っている災害のほぼ全てに見受けられる。すなわち避難訓練は、緊急時の対応を実話に基づいて行っていることに等しく、命を守るための重要な訓練の1つである。

4. まとめ

低・若年齢層に対する有効的な防災教育方法として、彼らが好んで実施すると考えられるストリートダンスに着目し、これを避難訓練の振り付けにアレンジした「ストリートダンス避難訓練」を開発した。本稿では、開発の経緯と振り付けの内容を示し、低・若年齢層に対する防災教育実施方法の検討の必要性を示した。

謝 辞

ストリートダンス避難訓練を開発するにあたり、徳島大学環境防災研究センターのスタッフおよび学生諸氏、徳島市社会福祉協議会、徳島新聞社はじめ徳島県内各メディアに多大な協力を得た。ここに記して感謝を示す。

参考文献

- 1) 黒崎ひろみ、中野 晋、山本博之、木村泰之、浜大吾郎：中学校における沿岸防災教育の実施とその有効性、海岸工学論文集・第53巻、pp.1315-1319、2006



写真-4 防災講演会講師派遣



写真-5 脚の対角を握る

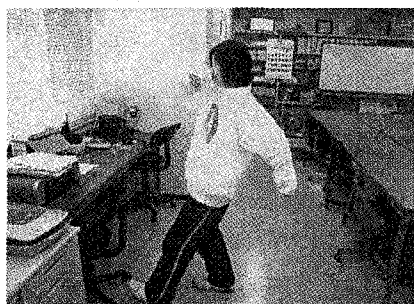


写真-6 避難する

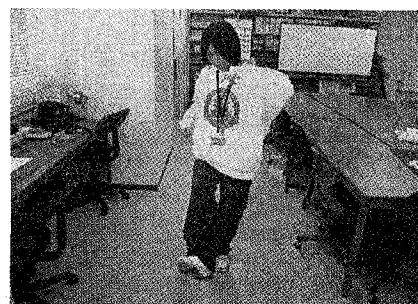


写真-7 靴を履く